

佐賀市文化財調査報告書第20集

上和泉遺跡

— A・B・C地区 —

昭和63年3月

佐賀市教育委員会

序 文

農業基盤整備事業に伴う発掘調査は、この久保泉地区では昭和60年度から実施しており、いままで考古学的に空白の部分が多かった平野部の資料が少しずつ増加しています。

上和泉遺跡（A・B・C地区）では平安時代の土壌、ピット、江戸時代の溝を検出しました。

特に平安時代のものは土壌、ピットで祭祀を行っており、好資料を得ることができました。

なお、調査に関して御指導・御協力を賜りました佐賀県教育委員会、佐賀県農林部ならびに地元の関係各位に対しまして深く感謝申し上げます。

おわりに、本書が埋蔵文化財に対する認識と、歴史の解明に少しでも資するものであるならば幸甚です。

昭和63年3月31日

佐賀市教育委員会

教育長 山 田 清 人

目 次

I 序 説	1
1. 調査に至る経過	1
2. 調査の組織	1
II 位置と環境	1
1. 地理的環境	1
2. 歴史的環境	1
III 調査の概要	3
1. A地区	3
(1) 土壌	3
(2) ピット（小穴）群	8
(3) 柵列	11
(4) 溝	11
2. B地区	12
3. C地区	13
(1) 土壌	13
(2) 溝	17
4. まとめ	17
5. 出土品一覧表	21

図 版 目 次

図版 1	調査区全景
図版 2	A地区全景 C地区全景
図版 3	S K002土壌 S K003土壌 S K004～006土壌
図版 4	S K008土壌 A地区ピット群 P－2
図版 5	P 3, 20, 22
図版 6	S D002溝（土層断面） B地区全景
図版 7	C地区 S K010土壌土器出土状況 C地区 S K010土壌土器取上げ後
図版 8	C地区 S K011土壌 作業状況
図版 9～15	出土遺物写真

例 言

1. 本書は佐賀市教育委員会が佐賀県農林部からの委託によって、昭和62年度に実施した上和泉遺跡（A・B・C地区）の発掘調査報告書である。
2. 遺構の実測、写真撮影、原稿執筆は福田義彦が行った。
3. 出土遺物の復元、実測、図面のトレースは調査員の指導のもとに佐賀市教育委員会循誘収蔵庫で行った。担当は以下のとおりである。

遺物復元 鬼崎玲子、浜田糸子

遺物実測、図面のトレース 野中須矢、浜田糸子

4. 出土品は佐賀市高木町15番30号、佐賀市教育委員会循誘収蔵庫に保管している。

凡 例

1. 遺構についてはほぼ検出順に通し番号を付し、その前にSK（土壌）、SD（溝）P（ピット）の分類記号を付した。
2. 遺構の法量はm単位、遺物の法量はcm単位を原則として用いた。
3. 遺構実測図および本文中の北方位はすべて座標北である。
4. 遺物実測図の中心線が一点破線となっているのは反転復元を表わす。
5. この遺跡の略号はKIZであり、A地区であるならば、KIZ-Aと表記する。

I 序 説

1. 調査に至る経過

昭和60年度から実施されている久保泉東部地区圃場整備事業は、昭和62年度で3年目をむかえ、工事面積も少しずつ増加していく傾向にある。この工事に先だち、昭和61年度秋に当該地区の確認調査を実施した。その結果3,000平方メートルの広がりをもつ遺跡が確認された。この調査結果を基礎に、佐賀県農林部、県教委、佐賀市土地改良課、佐賀市教育委員会の四者で埋蔵文化財保護に関する協議を実施した。協議の結果、遺跡の検出された地点は水路予定地及び地下げ予定地であるから、発掘調査を実施し、記録保存とすることになった。

調査は畑地部分をA地区、水田部分をB・C地区とし、昭和62年6月4日から着手し、昭和62年8月31日に終了した。発掘調査後の出土遺物整理は循誘収蔵庫で実施した。

2. 調査の組織

調査主体 佐賀市教育委員会

事務局 佐賀市教育委員会社会教育課

参事兼課長 山口喜代治

課長補佐 江川光男

文化係長 中野和彦

事務吏員 本告敬資（昭和62年7月まで）

甲木亮一（同年8月から）

福田義彦（調査担当）

発掘作業員 村川キクエ、生田美代子、広瀬幸子、橋本絹子、原ミチエ、宮地峯子、富永ツヤ子、角田千代乃、三好芳子

調査協力 佐賀県農林部、佐賀県教育委員会、佐賀市土地改良課、久保泉地区土地改良区、山豊建設株式会社、新九州測量株式会社

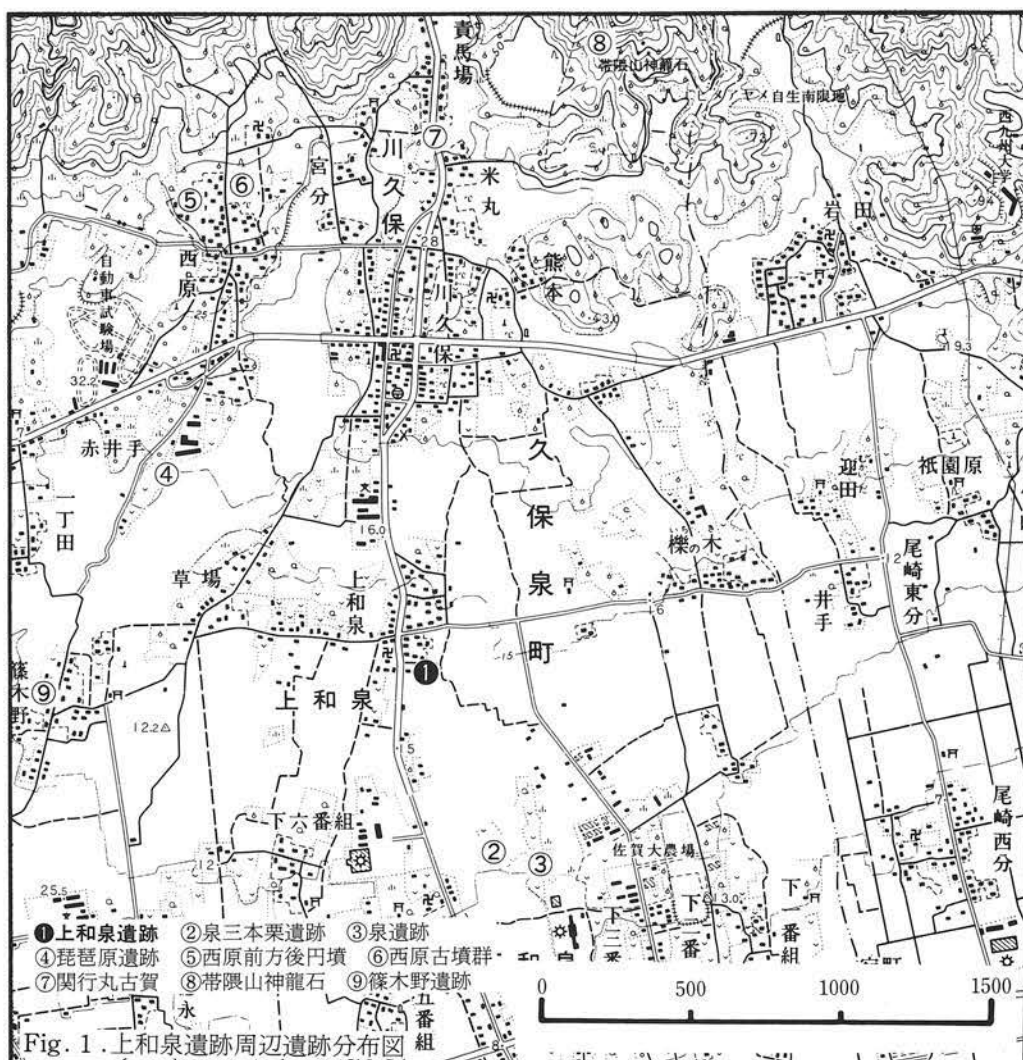
II 位置と環境

1. 地理的環境

上和泉遺跡は佐賀市久保泉町大字上和泉字泉に所在する。佐賀市域の北東部で上和泉地区の東側は神埼町と接している。周辺はその大半が田であるが、市域南部に見られるクリークはほとんどなく、その灌漑は急流小河川によるものである。このような田が広がっている中で、その比高差約1メートルの低丘陵が点在する。遺跡はこのような低丘陵及びその周辺により多く存在する。

2. 歴史的環境

久保泉地区は脊振山南麓とそこから広がる平野部のほとんどが埋蔵文化財包蔵地とされている。^{註1}表面採集できる遺物は縄文期～江戸期に至るまでのものがあるが、実際の調査例は少ない。



圃場整備関係の調査では、昭和60年度調査の泉遺跡、昭和61年度調査の泉三本栗遺跡の2例があり、本年度で3例目の調査となる。その内容としては、弥生・古墳時代の集落、中近世の生活跡となっている。

久保泉町の調査は主として、脊振山系の南麓部に集中しており、九州横断自動車道建設に伴うものだけでも、東から鈴熊遺跡^{註4}、西原遺跡^{註5}、丸山遺跡^{註6}、藤付遺跡^{註7}などがある。

その他のものとしては関行丸古墳^{註8}、帯隈山神籠石^{註9}の調査例がある。このような遺跡はその立地条件から、出土遺構の多くが墳墓であり、それを造営するための生活基盤が南部の平地に予想されていた。

前述のとおり、わずかではあるが、山麓部に墳墓が造られた時期と同じ時期の集落が検出されており、今後の調査の増加によりその関連性を解明できるものとする。

- 註1 佐賀県教育委員会『佐賀県遺跡地図』昭和55年
 註2 福田義彦『泉遺跡』佐賀市文化財調査報告書第17集 昭和61年
 註3 同 『泉三本栗遺跡』佐賀市文化財調査報告書第18集 昭和62年
 註4 蒲原宏行他『九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査概報 第4集』昭和56年
 註5 田平徳栄他『西原遺跡』九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告書(3) 昭和58年
 註6 東中川忠美他『久保泉丸山遺跡』九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告書(5) 昭和61年
 註7 松尾吉高他『香田遺跡』九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書(2) 昭和56年
 註8 渡辺正気他『関行丸古墳』佐賀県文化財調査報告書 第七輯
 註9 鏡山猛他『帯隈山とその周辺』佐賀市文化財調査報告書 昭和42年

III 調査の概要

調査対象地区は幹線用排水路Ⅲ—3号予定地(A・B地区)と幹線用排水路Ⅲ—2号予定地(C地区)の合計3,000平方メートルである。出土遺構は土壌、溝、柵列、小穴群などがある。遺物は主として平安時代の土師器坏が大半を占めるが、江戸時代の溝からは陶磁器類も出土している。特徴的な遺物・遺構をとりあげ後述する。

1. A地区

(1) 土壌

A地区で8箇所を検出した。規模・形状がまちまちで、調査区中央以北に集中して位置する。後述するピット(小穴)との区別は便宜的に径0.5m以上のものを土壌として取扱っている。その中で残存状況の良好なものや特徴的なものを後述する。

S K 002土壌 (Fig. 3)

A地区東端にあって周辺にはS K 003土壌がある。この遺構周辺の地山は淡黒色粘土混りのものである。上面の平面形は隅丸方形を基調とするもので、北辺にピットとの切合い関係があり、不定形となっている。上面中央部で南北1.1m、東西1.03m、深さ0.2mを測る。底面は起伏があり、中央部が最も深くなっている。

埋土は淡黒褐色を呈し、掘込み面が検出しづらいものであった。遺物は中央部と東部に残存状況が良好な土師器坏を検出した。

S K 003土壌 (Fig. 4)

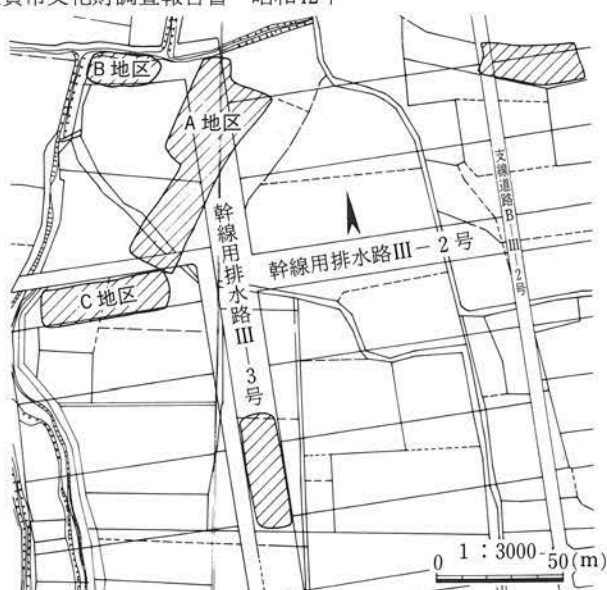


Fig. 2 . 上和泉遺跡調査地区配置図

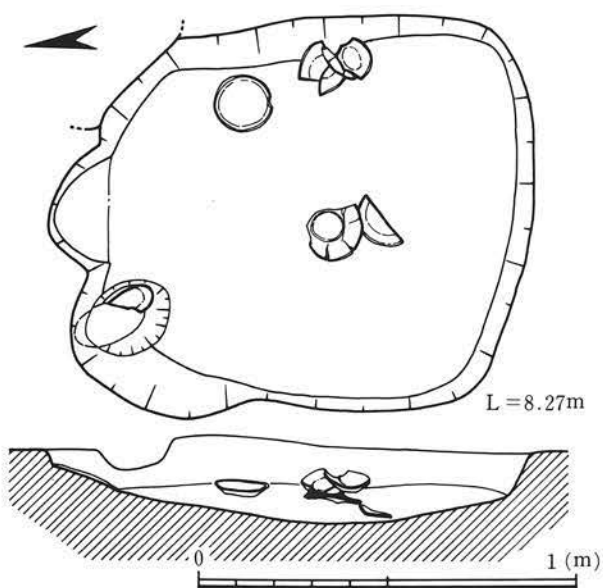


Fig. 3. S K002土坑実測図 (1/20)

A地区中央東端にあって上面の平面形は隅丸長方形を基調とするものとする。中央部で東西1.68m、南北0.57m、深さ0.34mを測る。南側掘込みを小溝に0.5mの幅で切られ、ややいびつな形を呈する。底面はゆるやかな起伏があり、壁は角度をもって立ち上る。遺構は淡黄褐色の粘土層に掘り込まれ、残存状況も比較的良好なものといえる。

遺物は東半部に集中し、掘込み下0.05~0.2mの深さで検出した。器種はそのほとんどが坏である。

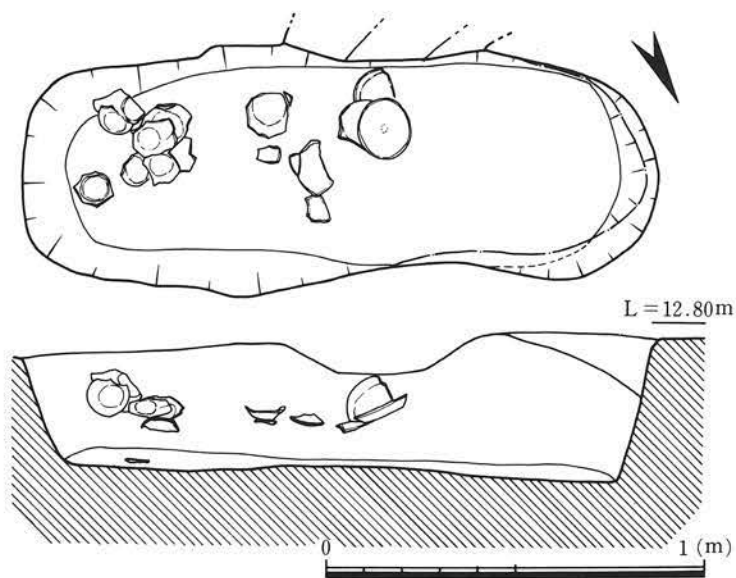


Fig. 4. S K003土坑実測図 (1/20)

上面中央部で東西1.98m、南北1.13m、深さ0.27mを測る。また、中央南寄りに径0.18m、深さ0.2m程度の小穴を検出した。

埋土は淡黒褐色を呈し、遺物は全体から検出したが、比較的良好なものは底部に集中していた。土師器坏が出土品の大部分を占める。

S K 005土坑 (Fig. 6)

S K 004土坑 (Fig. 5)

A地区中央東寄りに位置し、周辺にはS K003、S K005土坑などがある。上面の平面形は楕円形を基調とするものであるが、北西部がやや突出している。南側掘込みは他の遺構と切れあい0.05m程度削平されている。底面はわずかに舟底状を呈し、壁は比較的角度をもって立ち上る。

A地区中央東寄りに位置し、SK004に切られている。上面の平面形は三角形を呈するが、本来四角形を基調としたものとする。残存している最大幅は東西1.5m、南北0.9mで深さは最深部0.15mを測る。底部はやや起伏があり、東部になるにつれて深くなる。壁は比較的緩やかに立ち上る。

埋土は淡黒褐色を呈する。遺物は遺構中央部に集中し、主として土師器片が出土した。残存状況は比較的良好で、2～3枚重ねた状況で検出した。

SK008土壌 (Fig. 7)

A地区北東部に位置し、周辺にはピット（小穴）群がある。上面の平面形は不定

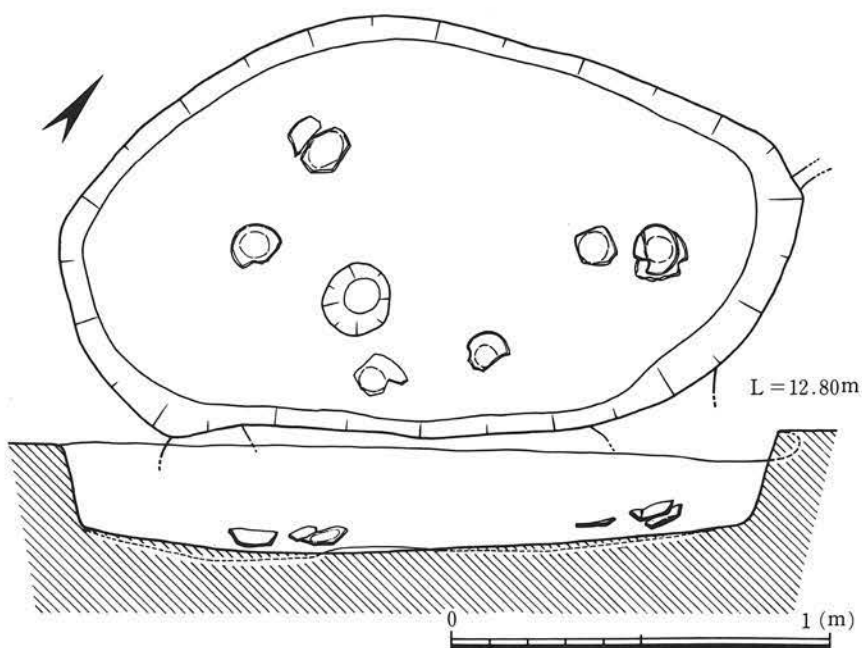


Fig. 5 . SK004土壌実測図 (1/20)

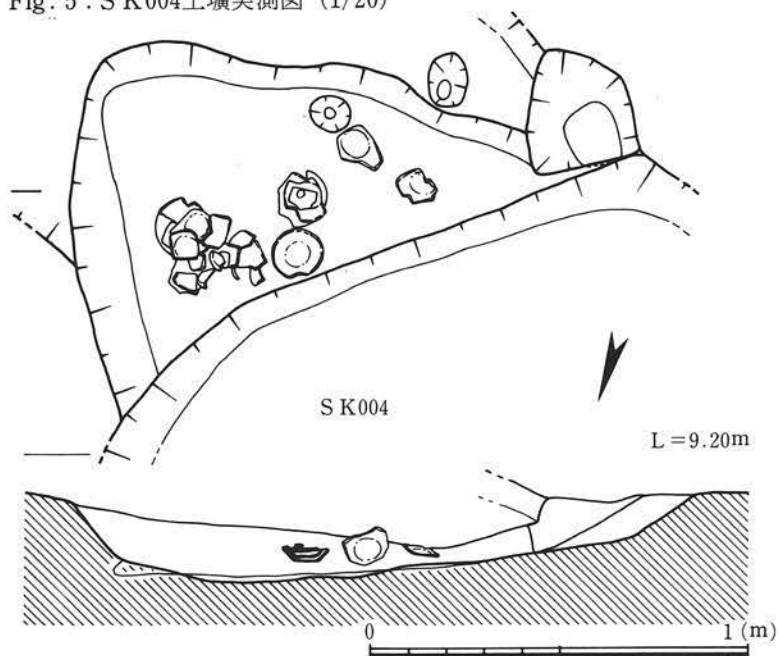


Fig. 6 . SK005土壌実測図 (1/20)

形で、南北0.86m、東西0.7m、深さ0.17mを測る。底部はわずかに舟底状を呈し、壁は東側が緩やかに、西側が角度をもって立ち上る。北端には径0.3m、深さ0.2mの小穴があるが、これはこの土壌には伴わないものとする。

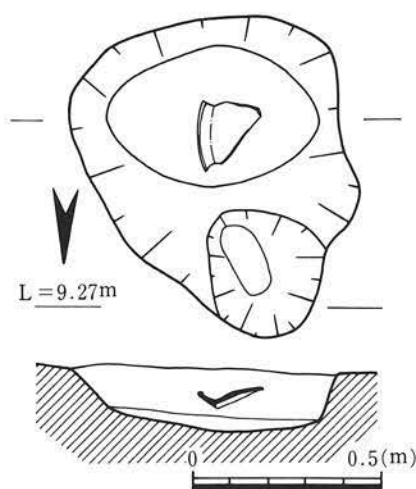


Fig. 7. S K008土壌実測図

埋土は淡黒褐色を呈し、遺物は図中にある土師器の甕型土器のみである。掘込み下0.1mで検出した。

土壌出土の遺物 (Fig. 8, 9)

出土物はすべて土器である。種類は土師器と須恵器である。1は土師器高坏の脚部。残存高11.2cm。外面は絞り上げ状の強いナデがある。坏部内面底部にヘラミガキ痕が見られる。2は土師器坏(蓋)。口径15.25cm、器高2.6cmを測る。天井部は平坦で、口縁端部は内湾している。3～7は土師器坏。ヘラ切りで底部には柱状圧痕があるものもある。口径12.0～13.7cm、器高3.2～4.1cm、底径6.7～7.85cmを測る。底部はほぼ平坦で体部は直線的に立ち上る。8・9は土師器坏。口径16.7～17.0cm、器高1.65～1.75cm、底径13.6cmを測る。口径が大きく器高が底い一群である。底面の器壁が厚く口縁部になるに従い薄くなる。10は土師器碗。口径15.05、器高6.35cm、高台径8.4cm。体部は内湾気味に立ち上る。器体内面は口縁下部から底部にかけてヘラミガキが施されている。11は須恵器碗である。口径14.8cm、器高5.5cm、高台径7.8cmを測る。高台付近の器壁が厚くなっており1cmを測る。体部は内湾気味に立ち上り、口縁端部は外反する。12は土師器、13は須恵器の碗。口径は18.6～19.0cm、器高9.3cm(12のみ)、高台径10.2cm(12のみ)を測る。平坦な底部から体部は直線的に角度をもって立ち上る。器壁は法量からみてやや薄い。14は土師器甕型土器。口径27.6cm、残存器高15.8cm。体部は内湾気味に立ち上り頸部より外反する。口縁端部外面は幅0.3cmの沈線がめぐる。器面調成は外面がナデ、ヨコナデの後、下方から上方に向けての力強いハケ目。内面は体部が横方向のヘラケズリ、口縁部が外面と同じような力強いハケ目がある。このハケ目は一部体部にまでおよんでいたらしく、ヘラケズリでハケ目を消している痕跡が認められる。15は土師器甕型土器。口径18.6cm、残存器高9.3cm。体部は内湾気味に立ち上り頸部より外反する。口縁部外面は力強い回転ヨコナデにより、外面端部が突出した様相を見せる。調整は外面が細かいハケ目のあとまばらに、横方向のナデ。内面は体部がヘラケズリ、口縁部がヨコナデ。胎土は2～3mmの石英を多く含む。16は甕型土器の底部。丸底になるものとする。17～27は土師器坏。口径12.0～15.85cm、器高3.1～3.95cm、底径6.8～8.6cmを測る。法量では17～26と27の間に一線が引けるものとする。大半が底部外面に柱状圧痕を有する。28は高台を有する土師器碗。口径16.78cm、器高7.15cm、高台径8.4cmを測る。器壁の厚い平坦な底部から体部はやや内湾気味に立ち上る。内外面共に回転ヨコナデの痕が明瞭である。29～33は器高が低く、底径が大きい土師器坏の一群である。法量(口径)から見て29・31と30・32・33の間に一線が引ける。底部には柱状圧痕を有する。

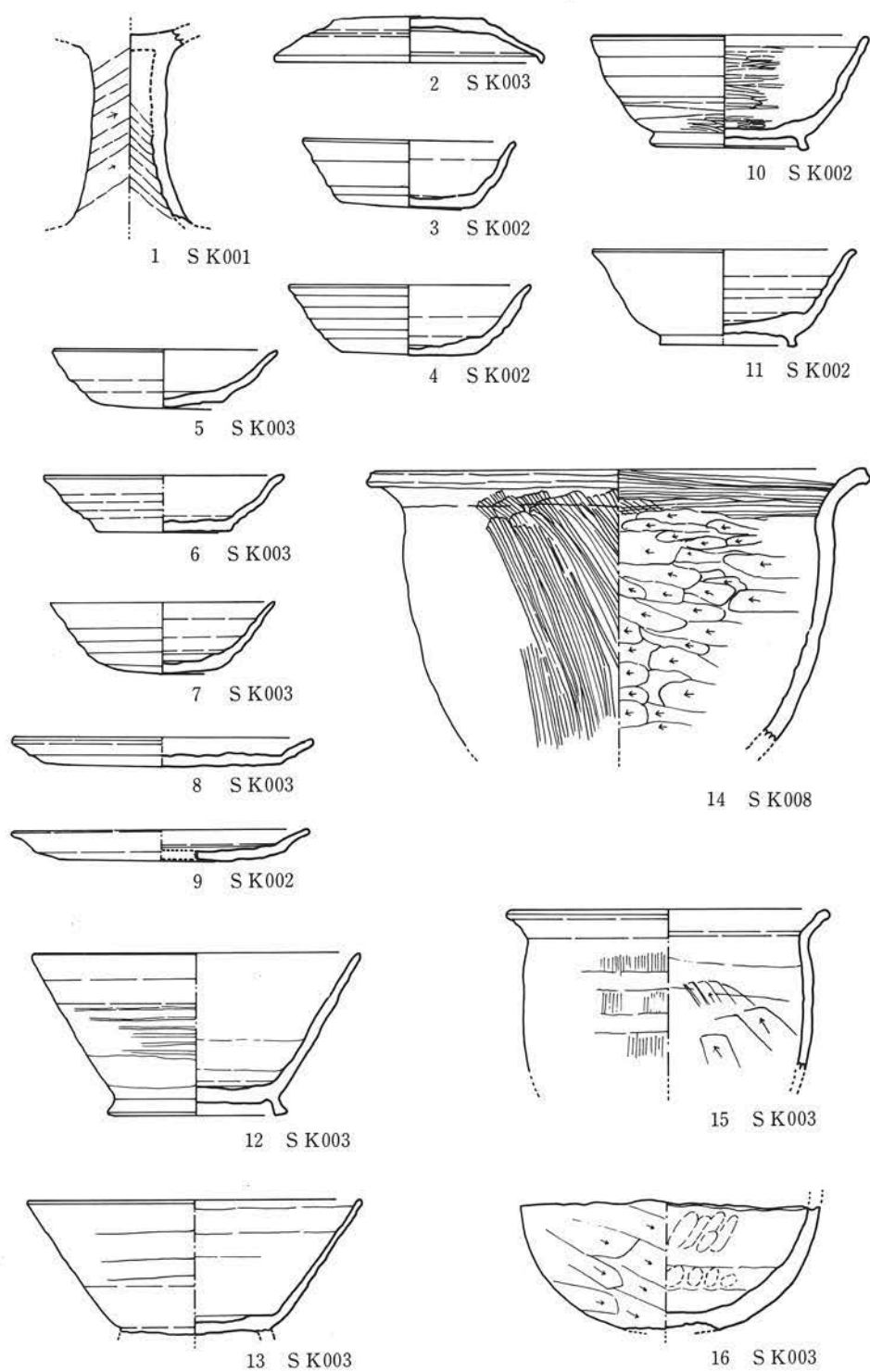


Fig. 8. 土壇出土土器実測図 (S=1/4)

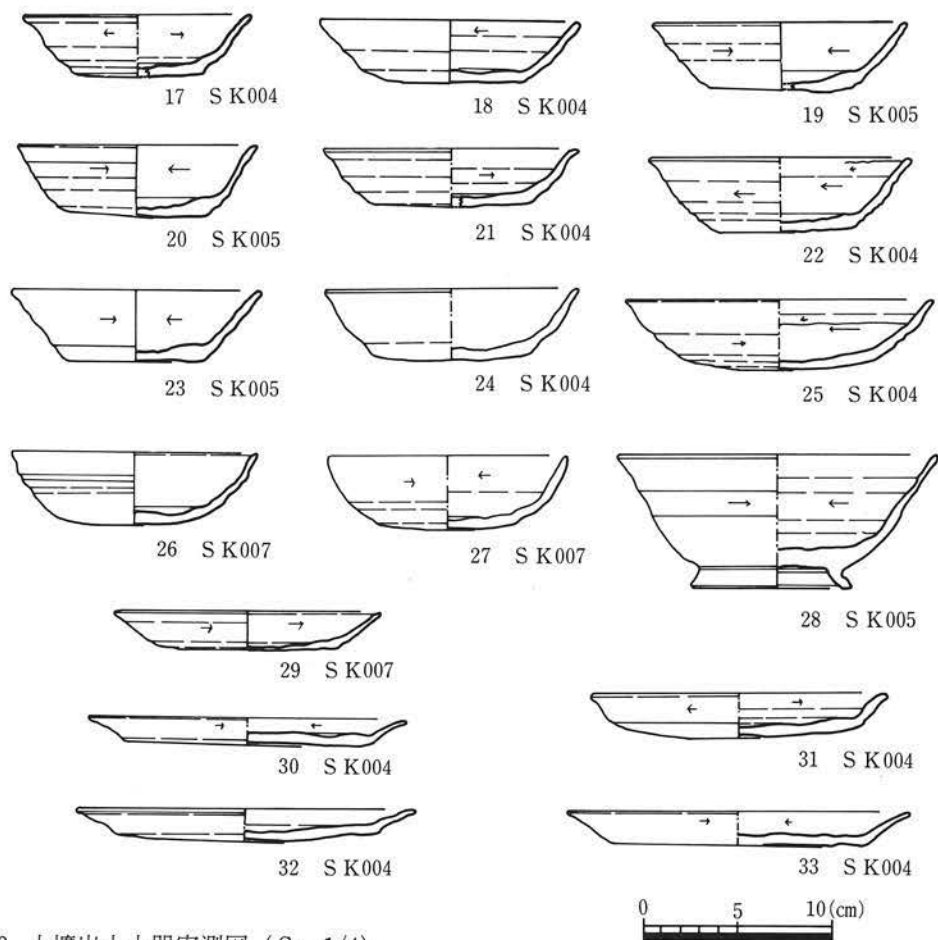


Fig. 9 . 土壇出土土器実測図 (S=1/4)

(2) ピット (小穴) 群

A地区北東部に集中して検出した。相互の位置関係は柱穴群に見られるように等間隔では位置していない。ここで取り上げるものはいわゆる土壇の小型のもので、その中に遺物(土器)が流れ込みではなく、埋納された状況で検出したものである。

P-2 (Fig.10)

調査区北東部に位置する。上面の平面形は瓢型を呈するが、P-2 本体は東部のみと考える。上面掘込みの検出時には切合い関係は不明であったが、掘り進むうちに左側のピットの東壁を検出した。P-2 本体は径0.4m、深さ0.17mを測り、上面の平面形は元来円形であったものと考ええる。

埋土は淡黒褐色で土器細片を少量含む。遺物は遺構中央部の上層で土師器坏を検出した。

P-3 (Fig.11)

調査区北東部に位置する。上面の平面形は楕円形を基調とするものであるが、やや北部が突

出している。掘込み上面の中央部で南北0.43m、東西0.35m、深さ0.1mを測る。底面は緩やかな起伏があり、壁は比較的なだらかに立ち上る。

埋土は淡黒褐色を呈し、遺物は遺構中央部から須恵器（甕）を一点検出した。

P-20 (Fig.12)

調査区北東部に位置する。上面の平面形は楕円形を基調とするもので、長径0.46m、短径0.76m、深さ0.09mを測る。底部はほぼ平坦で壁は緩やかに立ち上る。

埋土は淡黒褐色で遺物は中央からやや南西にはずれた位置で検出した。種別は土師器坏で、3個体分重ねた状態で検出した。

P-22 (Fig.13)

調査区中央東寄りに位置し、SK003土壌に隣接する。上面の平面形は円形を基調とするもので径0.35m、深さ0.2mを測る。底部はやや起伏があり、壁は直線的に立ち上る。

遺物は掘込み下0.08~0.16mの間で検出し種別は土師器坏4点である。1枚を伏せて底部に置き、残りの3枚はその上に重ねている。

ピット出土の遺物

出土遺物の大半が土師器坏である。比較的残存状況の良好なものを図化した。34~36はへら切りの土師器坏。底部に柱状圧痕を残すものもある。体部は内湾気味に立ち上り、器壁は薄い。37は土師器鉢。丸底で体部は内湾しながら立ち上り、口縁部でさらに内側に傾く。器面調整は主としてナデとヨコナデ。胎土に0.1~0.2cmの石英を多含。

38・39は土師器坏蓋、38は口径

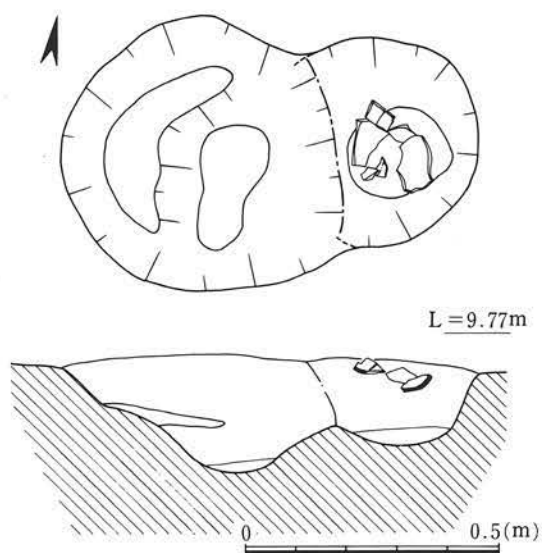


Fig.10. P-2実測図 (1/15)

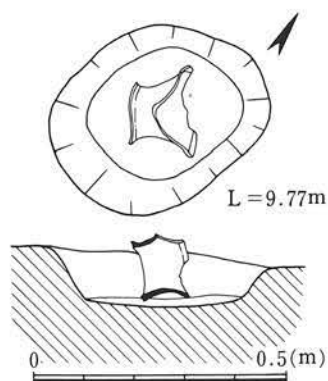


Fig.11. P-3実測図 (1/15)

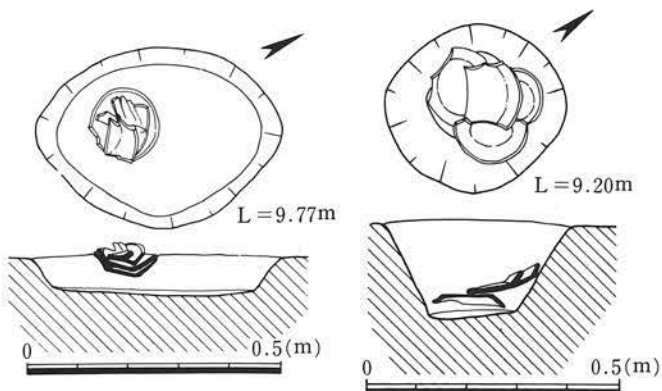


Fig.12. P-20実測図 (1/15) Fig.13. P-22実測図 (1/15)

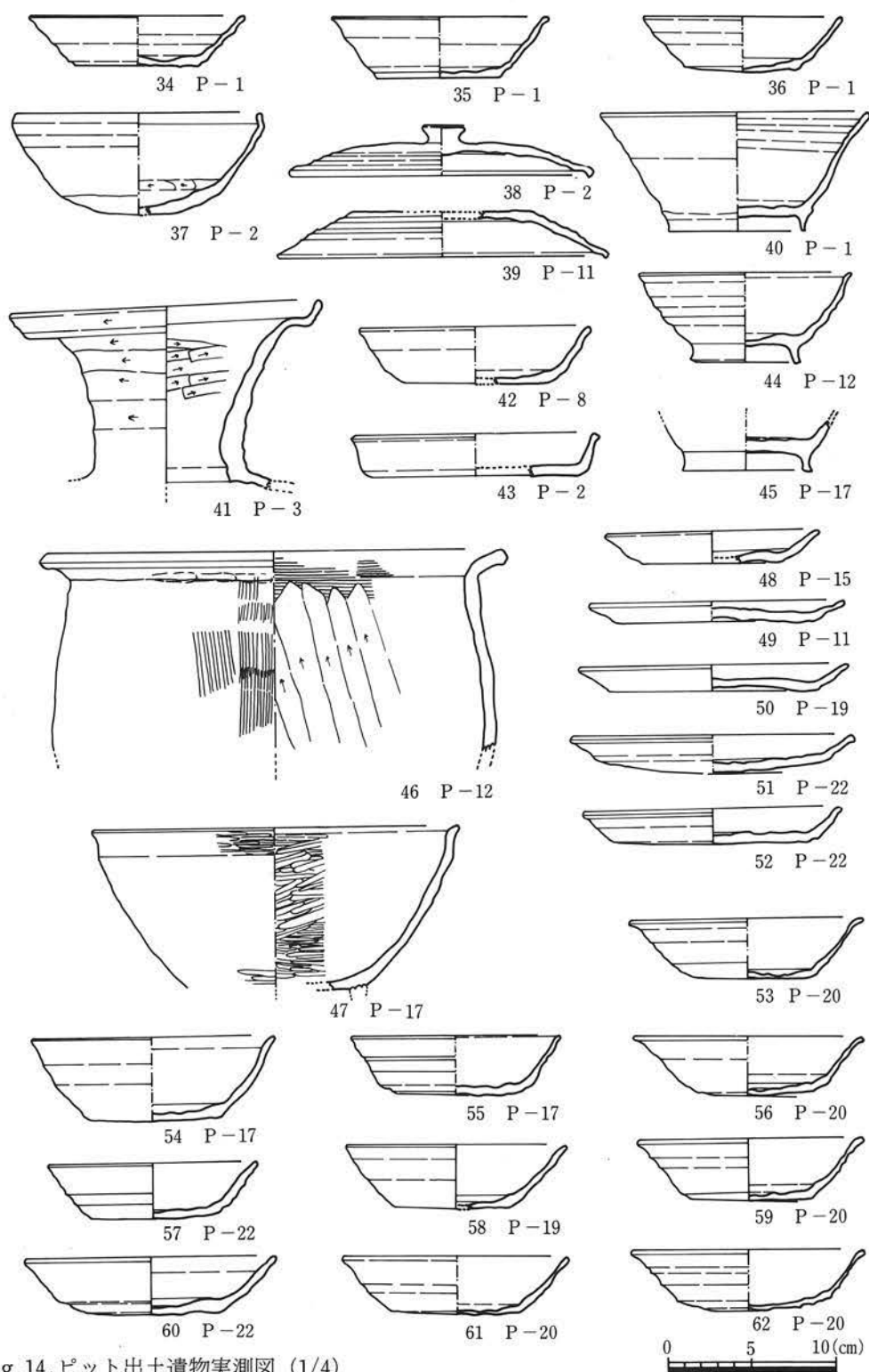


Fig. 14. ピット出土遺物実測図 (1/4)

17.6cm、器高3.0cm。平坦な擬宝珠を有し、口縁端部は内湾する。41は須恵器壺。頸部以下は欠失。口径18.2cm、残存高10.3cm。頸部は外反気味に立ち上り、口縁部は複合口縁状になる。器面調整は内外面ともに力強い回転ヨコナデが施してある。ロクロ回転は右。

43は土師器坏。細片ながら出土土師器坏の一群の中では特異な器型であったので図化した。口径14.2cm、器高2.5cm、底径12.2cm。平坦な底部から体部は角度をもって立ち上る。40・44・45は高台付の土師器碗。40で口径16.1cm、器高7.0cm、高台径8.1cm。体部は内湾気味に立ち上り、器面調整は内外面ともに強い回転ヨコナデが施してある。46は土師器甕。口径2.69cm、残存器高12.7cm。体部は内湾気味に立ち上り、口縁部は外反する。器面調整は外面ハケ目とヨコナデ、内面ヘラケズリと横方向のハケ目が施されている。47は土師器鉢である。底部の欠失状況から高台があったことがわかる。体部は内湾気味に立ち上り、口縁部はわずかに外反する。内面全域が黒色を呈する。器面調整は外面が回転ヨコナデ、内面が回転ヨコナデの後、横方向にヘラミガキが施されている。48～52は器高の低い土師器坏の一群、口径12.8～16.65cm、器高1.8～2.7cm、底径8.2～12.3cm。底部外面に柱状圧痕を有する。53～62は土師器坏。口径12.3～14.7cm、器高2.7～3.6cm、底径6.7～8.0cmを測る。底部は平坦なものやや丸みを帯びるものがある。すべてヘラ切りの坏である。

(3) 柵列 (Fig.21 A地区遺構配置図)

A地区ピット群の東に位置し、柱穴の間隔は1.4m平均である。ピット群は南北に連なり、8.5mの長さの中に径0.2～0.3mのものが8個ある。深さはそれぞれ0.2～0.3mで埋土は淡黒色を呈する。出土遺物は土師器細片で図化できないが、前述のピット群出土の土師器と大差ない時期のものとする。

(4) 溝 (Fig.21 A地区遺構配置図)

調査区で4条検出した。西半部にかたより時期的には平安期のものと江戸期のものとに大別され、後者がその規模が大きい。

S D002溝は検出されたもののうちでは最も規模が大きく、検出全長約38m、平均幅2.5m、深さ0.4～0.6mを測る。調査区北部から南部に向けてほぼ直行し、南端で西に折れる。

埋土は淡褐色を呈す。出土遺物は溝中央部から陶磁器、土師質土器片を検出した。そのほとんどが掘込み下0.3mの深さまでに検出され、底面で検出されたものはない。大半が流れ込みによるものとする。

63は土師質の鉢。上半部の5分の1程度の残存状況。口径33cm。口縁部はほぼ垂直に立ち上り、口唇部は平坦である。器面調整は主として回転ヨコナデ。64-A、64-Bは同一個体と考えるが接点がない。土師質の甕で口径57cm、底径6.5cm。底部は上げ底で、体部は内湾気味に立ち上り、胴部上半からはほぼ垂直に立ち上る。器壁は法量から見ると薄い。器面調整は内外面共にヨコナデ、ナデ、ハケ目が施されている。全体的に磨耗が進んでいる。65は磁器皿。高台径

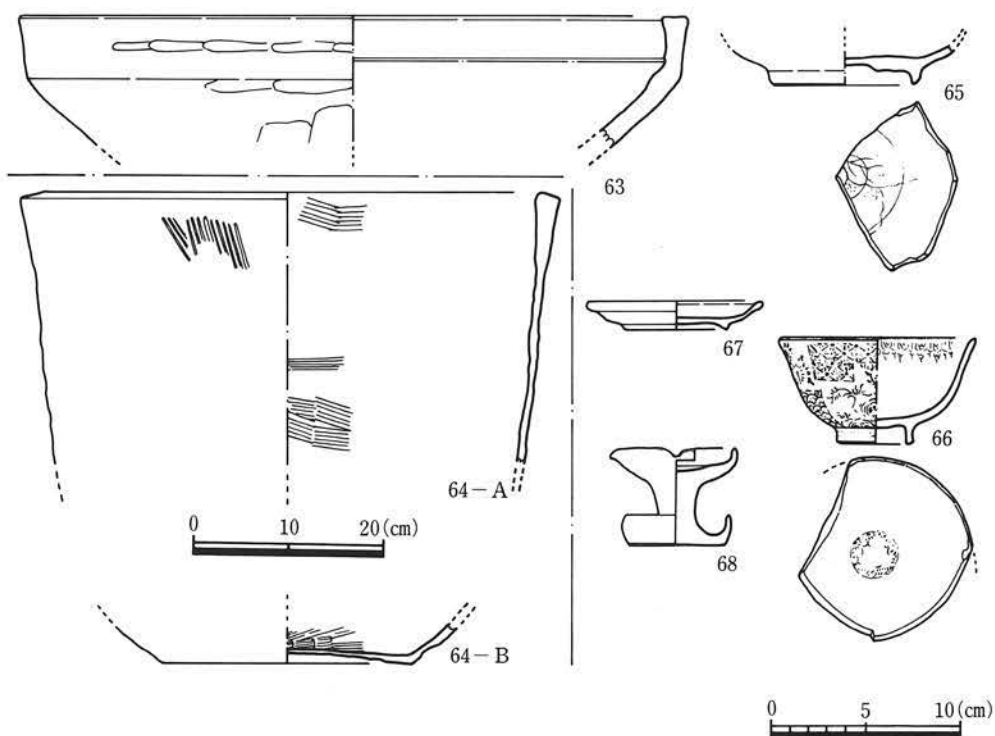


Fig.15. S D002出土土器、磁器実測図（S=1/4・3/1）

7.5cmを測る。内面見込みに木葉の文様があるが、重ね焼きにより仕上りを悪くしている。釉薬は非常に薄い。66は磁器碗で口径10.3cm、器高5.6cm、高台径4.1cmを測る。文様は外面全体と内面口縁部、見込みに花文・波状文を抽象化した文様を有する。文様の色調から見ると明治期以後の所産と考えられる。68は磁器の台付燈明皿か。口径6.2cm、器高5.1cm、底径5cm。注口の部分に黒色のスス状のものが付着している。底部は糸切りで釉薬はかかってない。色調はわずかに青みをおびる淡灰色。

2. B地区

A地区の西側約20mに位置する。南西部に接して径1.5m程度の「龍田寺塚」が存在する。この塚は現状保存されるということであったので調査は実施していない。しかし、耕作者に聞くと二十数年前までは4～5mの径があったらしい。塚の下部遺構の一部がB地区にも及んでいる可能性があったので調査を計画した。

表土を削いだところ、塚の下部遺構と思えるものは存在しなかったが、地表下0.3～0.5mの深さで流れ込みによると思われる土師器片を数点検出した。時期的には弥生時代～平安時代に及ぶものであったがいずれも細片で図化できなかった。

3. C地区

(1) 土壌

3箇所検出した。円形2、楕円形2基である。主なものを後述する。

S K 010土壌 (Fig.16) (遺物Fig.17)

調査区東部にあって、上面の平面形は円形を基調とするものである。上面の平均径1.3m、中央部で深さ0.6mを測る。底部は径0.4m程度の円形を呈し、断面は舟底状である。壁は上面からの深さ0.3mまではゆるやかに立ち上るが、そこから垂直に変化する。

埋土は上層が暗茶褐色、下層が灰褐色の粘質土であった。遺物は掘込み面と同レベルから下部に至る全域で検出したが、上層が細片であるのに対し、下部では比較的確存状況の良好なものが多かった。

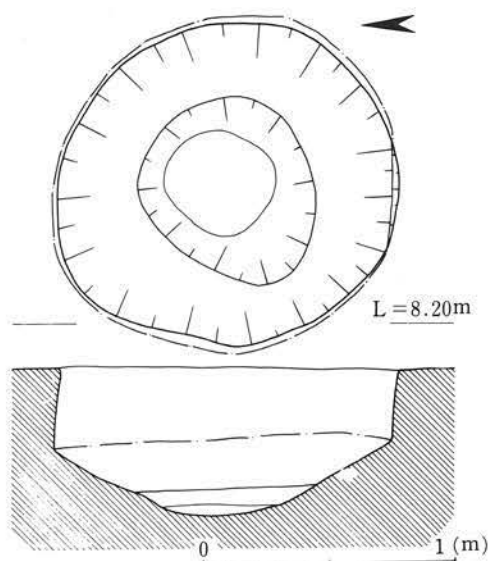


Fig.16. S K 010土壌実測図 (1/30)

69~71は比較的確高の高い土師器坏の一群。口径11.9~12.25cm、器高3.3~7.3cm、底径6.4~7.1cm。底部に柱状圧痕を有する。72~74は比較的確高が低い土師器坏の一群。口径13~17cm、器高1.5~2.35cm、底径8.8~10.7cm。平坦な底部から、体部は緩やかに立ち上る。底部外面に柱状圧痕を有する。75は高台付の土師器坏。口径13.6cm、器高7.8cm。ほぼ平坦な底部から、体部は直線的に立ち上る。76は土師器壺型土器。底部は丸底で体部は内湾しながら立ち上り、頸部で外反し短い口縁部をもつ。器面調整は外面上半が強い回転ヨコナデ、下半部がハケ目、内面上半が回転ヨコナデ、下半部がナデとなっている。口径18.4cm。77は高台付の土師器鉢。口径22.3cm、器高11.55cm、底径12.2cm。ほぼ完形である。平坦な底部をもち、体部はそこから直線的に立ち上り、口縁部で2度内湾する。器面調整は主として回転ヨコナデであるが、外面3箇所に力強く指腹を押しあてている部分がある。色調は全体として淡橙色であるが、内底部に赤褐色の部分がある。79は土師器壺型土器。口径24.1cm、残存器高19.4cm。底部は丸底であったものと推定する。体部は緩やかに内湾気味に立ち上り、頸部から外反する。器面調整は外面がヨコナデとハケ目、内面がヨコナデとヘラケズリが施されている。81は土師器壺型土器。器質は土師質であるが手法は須恵器のものと同様である。

S K 011土壌 (Fig.18) (遺物 Fig.19・20)

調査区の南東部にあり、北東方向2mにS K 010土壌が位置する。上面の平面形は楕円形を基調とするが、元来円形に近かったものと考える。長径2.3m、短径2.2m、深さは中央部で1.2mまで確認した。壁は掘込みから0.35m付近まではほぼ垂直に掘込まれ、そこから傾斜をもつテ

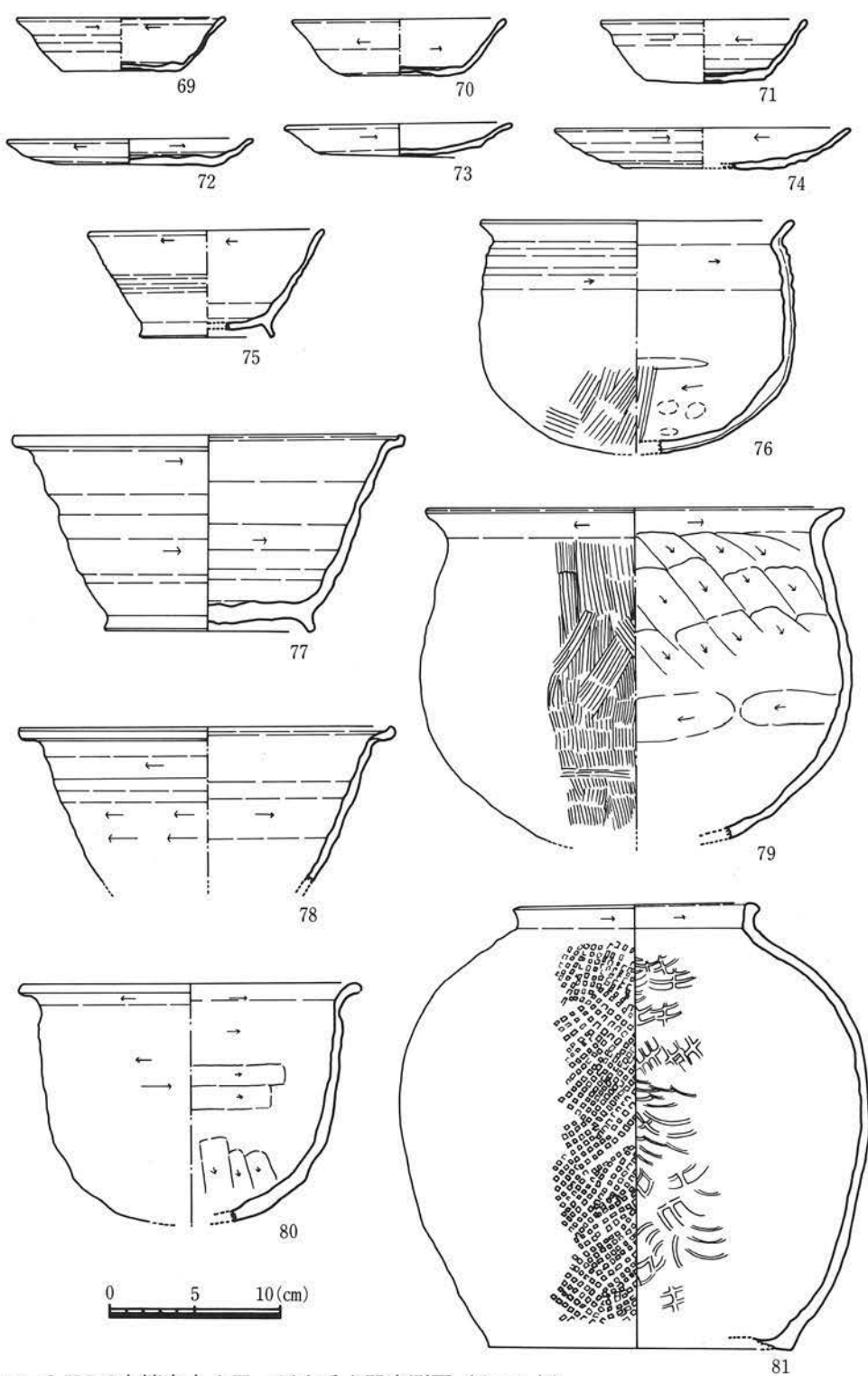


Fig. 17. S K010土壇出土土器、須恵盾土器実測図 (S=1/4)

ラスが0.15～0.45m延び、再度角度を変えて底部にむかう。

埋土は上層が暗茶褐色で、黄色の粘土ブロックが点在する。下層になるに従い淡灰色の粘質土となる。遺物は上半部より多数検出した。掘込み下0.3～0.6mの間で残存状況の良好なものを多数検出したので図化した。出土物の大半が土師器坏である。

83～90、92～96は土師器坏。比較的器高の高い一群である。口径12.22～15.5cm、器高2.8～3.7cm、底径6.4～8.2cm。体部は全体的に見て角度のある立ち上りをみせ、直線的である。ほとんどの個体の底部外面には柱状圧痕がある。91は須恵器坏。口径11.8cm、器高3.4cm、底径6.6cm。底部に柱状圧痕を有する。色調は灰褐色の部分が多いが、底部外面が赤褐色を呈する。97～103は土師器坏。比

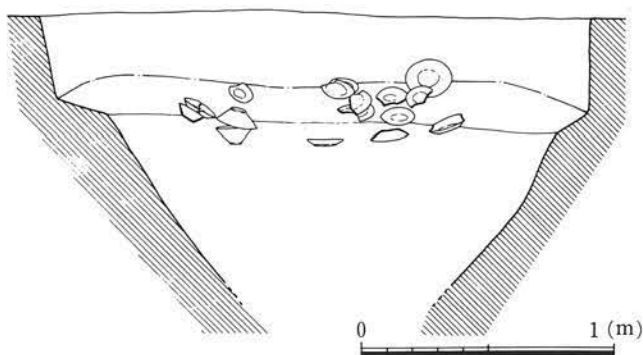
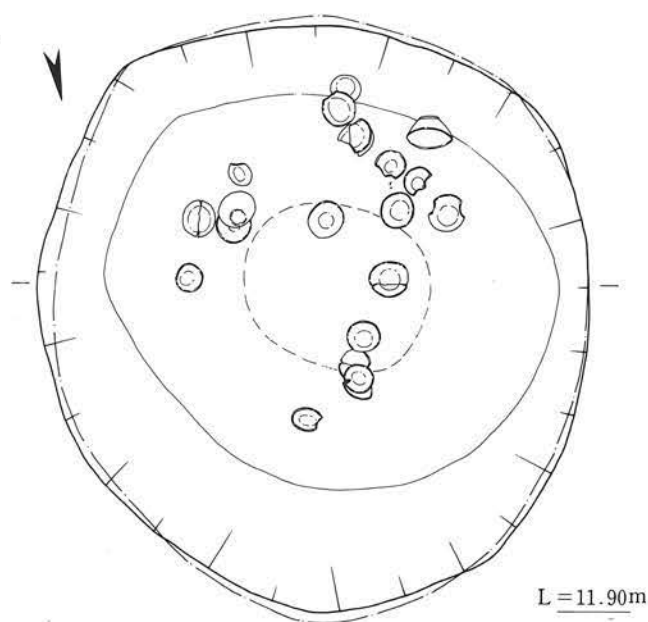


Fig. 18. S K011土坑実測図 (1/3)

較的口径が大きく器高が小さい一群である。口径14.15～15.5cm、器高1.3～2.1cm、底径10.35～12.4cm。底面は基本的には平底であるが、ヘラ切りの状況で上げ底状に見えるものもある。短い体部をもち口縁部は外反する。全体的に磨耗が進んでいる。104は土師器坏であるが、97～103のグループと比較すれば法量が突出している。口径21.1cm、器高2.0cm、底径17cm。底外面部にヘラ切り痕を有し、不定方向へのナデが施されている。短い体部をもち口縁部は外反する。105・106は土師器坏（蓋）でつまみはない。平坦な天井部をもち、口唇部に返りのなごりを有する。裾径15.5、14.9cm、器高2.2、2.1cm、天井外径8.8、8.9cm。107は須恵器坏で、つまみを有した痕跡がある。裾径13.8cm、天井部までの高さ1.8cmを測る。天井部は内湾気味に、自然と裾部につながる。端部に返りを持つ。108は土師器坏と考える。欠失している部分が、残存部分よりも角度をもって立ち上る痕跡を残している。残存部の口径9.2cm、器高1.35cm、底径4.5cm。ヘラ

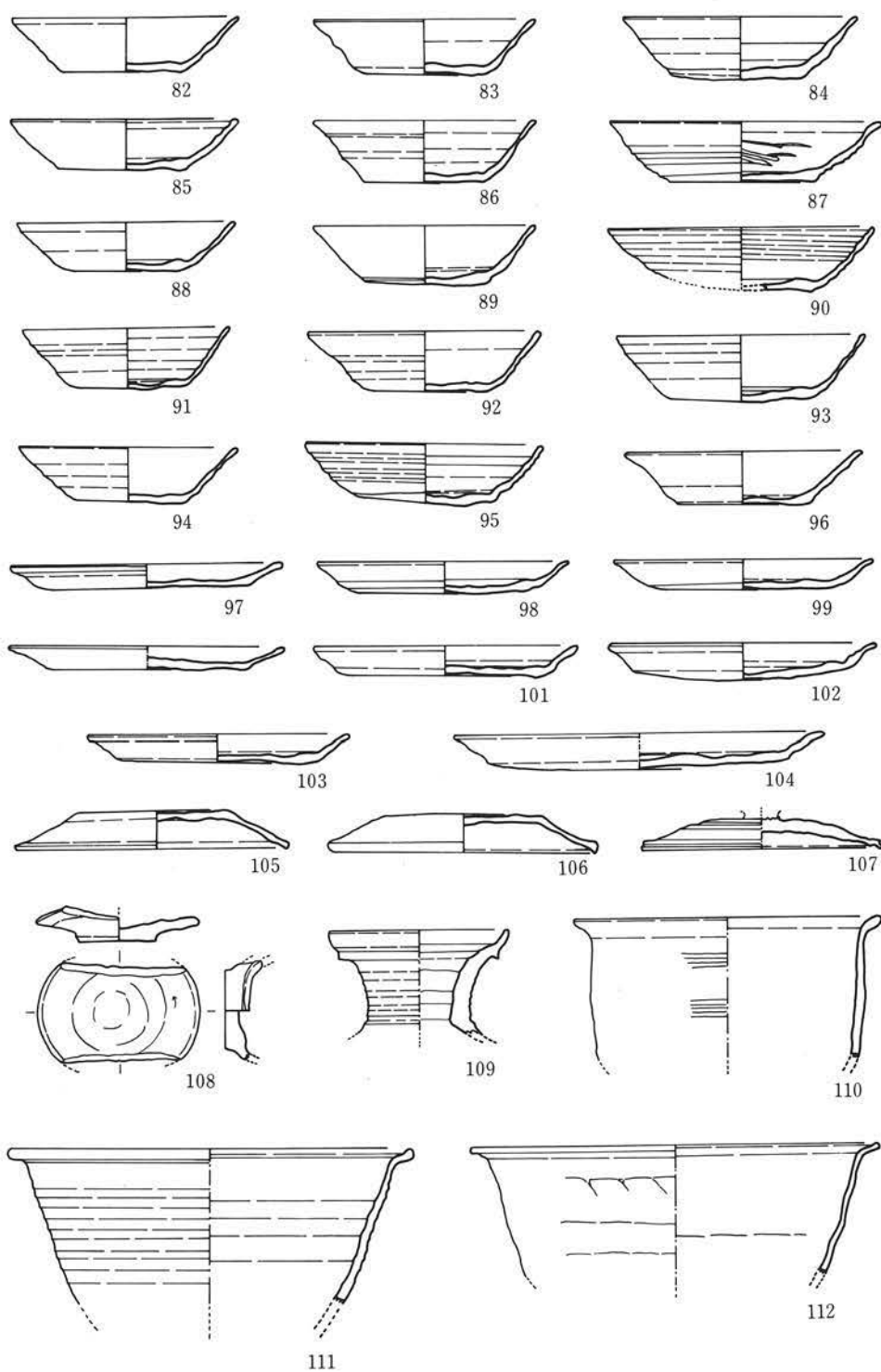


Fig.19. S K011土壇出土土器、須恵器実測図(1) (S=1/4)

0 5 10(cm)

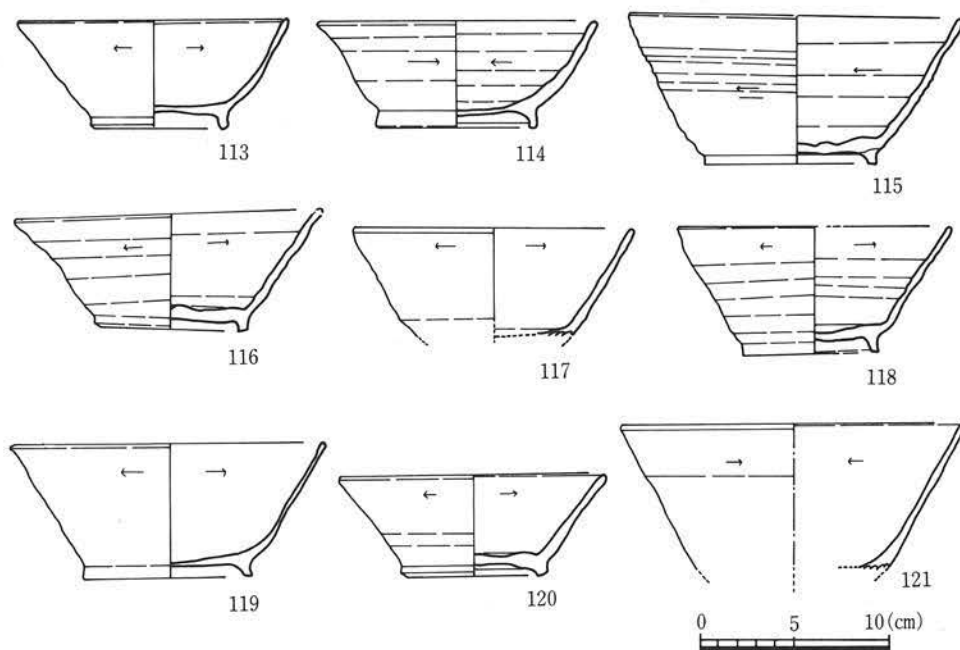


Fig.20. S K011土壌出土土器、須恵器実測図 (S=1/4)

切りの底部で側面からみると高台状を呈す。109は須恵器長頸壺の頸部以上。口径10.2cm、残存器高6cm。頸部は外反して立ち上り、外面は口縁部との境に稜を有する。短い口縁部は内湾気味に立ち上る。110は土師器甕型土器。口径17.6cm、残存器高8.0cm。短い口縁部はゆるやかに外反し、器面調整は主としてヨコナデ。111～112は土師器鉢。口径22.7・23.2cmを測る。口縁はわずかに内湾しながら、外に大きく傾く。口縁端部はつまみ上げにより形成されている。113～121は高台付の椀。114と118は須恵器で残りは土師器、法量では115・121とその他のグループに大別でき、形状では113・114のように体部が内湾気味に立ち上るものと、それ以外の、直線的に立ち上るものに大別できる。法量は完形もしくは復元実測のできるもののなかでは、120が最小で口径1.2cm、器高5.4cm、高台径6.9cm、最大は115の口径17.32cm、器高7.88cm、高台径9.1cmを測る。

(2) 溝

調査区中央で1条検出した。検出全長6m、平均幅1m、深さ0.05～0.1mを測る。

埋土はS K010・011土壌のそれと似ており、淡赤褐色を呈す。遺物は全く検出しなかった。

この溝はA地区方向から延びているが、A地区の溝の埋土の色調と大きくかけはなれており、A地区S D002溝の延長ではない。

4. まとめ

A・C地区から、平安時代の土壌、ピット、江戸時代の溝を検出した。前者からは土師器が多量に出土した。土壌やピットの性格については現在のところ断定できる資料はないが、次の

ような特徴があげられる。

1. 土壙、ピットから出土した土師器は、流れ込みによるものではなく、何らかの意図をもって埋置された様相を呈するものと、投棄されたものがある。
2. 投棄か埋置かを判断するには主観にすることが大きいですが、少なくともA地区のP-3, 8, 20, 22のように小規模の穴を掘り、土器を中に納めることを投棄とは言い難く、埋置されたものと考えたい。
3. 投棄されたものとするのはC地区SK010、011土壙のように大型で井戸状をするものである。

以上のことから、ピットや土壙の性格を考えてみたい。

ピットについては埋置することに何らかの意義が感じられ、それによって考えられる行為はやはり祭祀しかない。しかしながら何のための祭祀かは不明である。

土壙については、それが井戸の性格をもつものであれば、そこには使用廃止の際の祭祀が考えられる。

以上がピットや土壙についての所見であるが、この種のものの性格についてはまだ解明されていないので、今日は試論にとどめ、以後の資料増加をまち、再検討したい。

B地区については前述のとおり、遺構は全く検出しなかった。隣接する龍田寺塚についての考古学的な資料は得られなかった。この塚は、昔、大きな龍が死んだとき、頭部をこの龍田寺塚に、尾を隣接する神埼町西郷に埋置したという伝説がある。史実として考えられるものではないが、古来、この周辺が人々の生活の場であったということは言えよう。ちなみに、西方約50mに位置する龍田寺は元享年間（1321～24）の創建と伝えられている。

なお、本書末尾の出土遺物観察表の、遺物の用途については、その遺物の最終使用形態をもって表記している。



Fig.21. 上和泉遺跡A地区遺構配置図 (S=1/120)

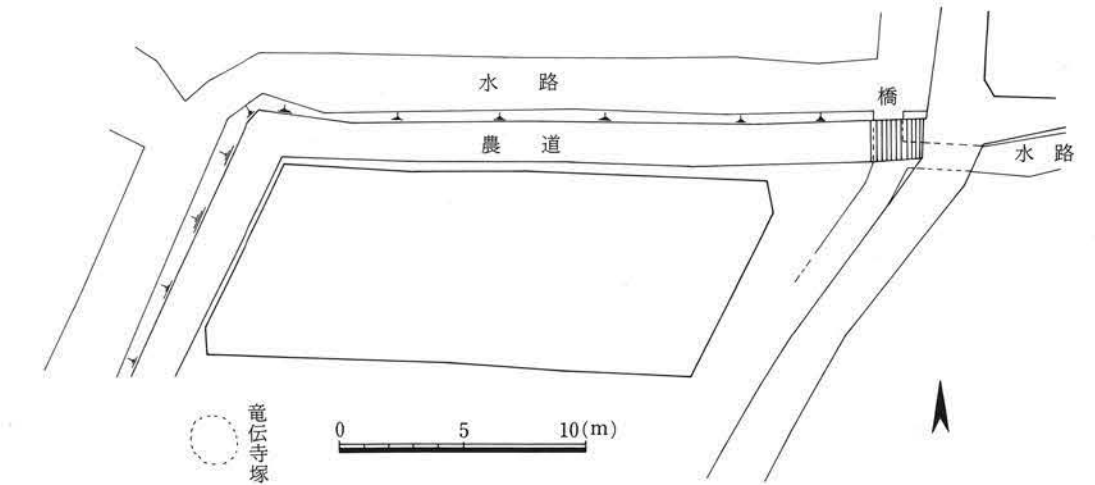


Fig.22. 同遺跡B地区測量図 (1/300)

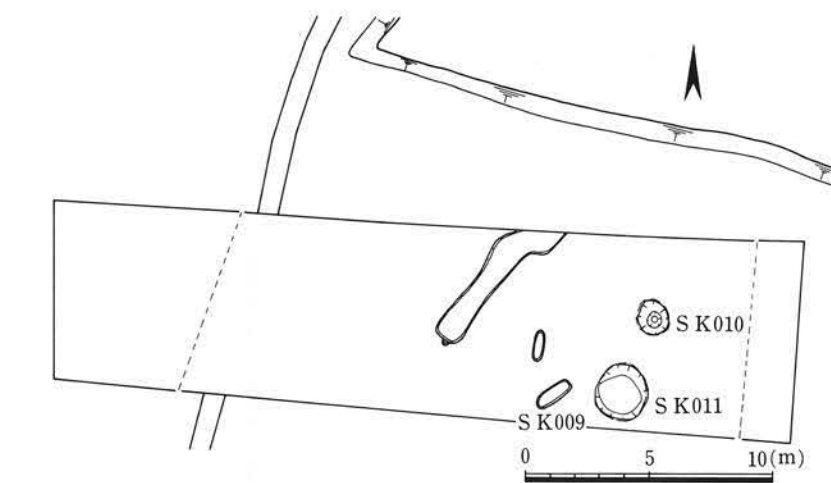


Fig.23. 同遺跡C地区遺構配置図 (S=1/300)

上和泉遺跡（A・C地区）出土土器一覽表

番号	時代	種 類	器 種	法 量 (口径)×(器高)×(底径)cm	残存状 況(%)	用途	出土遺構	出土年月日	実測番号
1	平安	土 師 器	高坏脚部	(一)×(11.2)×(一) 残	—	祭祀	SK001 土壇	87. 06. 11	KIZ-A 150
②	〃	〃	坏(蓋)	(15.25)×(2.6)×(一)	50	〃	SK003 〃	〃 07. 30	15
③	〃	〃	坏	(12.0)×(3.8)×(7.85)	〃	〃	SK002 〃	〃	16
④	〃	〃	〃	(13.55)×(4.05)×(7.75)	〃	〃	〃 〃	〃	17
⑤	〃	〃	〃	(12.7)×(3.35)×(6.9)	60	〃	SK003 〃	〃	23
⑥	〃	〃	〃	(13.7)×(3.2)×(7.4)	50	〃	〃 〃	〃	25
⑦	〃	〃	〃	(12.8)×(4.1)×(6.7) 復 復	70	〃	〃 〃	〃	26
⑧	〃	〃	〃	(17.0)×(1.65)×(13.6) 復 復	45	〃	〃 〃	〃	27
⑨	〃	〃	〃	(16.7)×(1.75)×(一)	40	〃	SK002 〃	〃	143
10	〃	〃	椀	(15.05)×(6.35)×(8.4)	60	〃	〃 〃	〃	22
11	〃	須恵器	〃	(14.8)×(5.5)×(7.8) 外径	80	〃	〃 〃	〃	14
12	〃	土 師 器	椀	(18.6)×(9.3)×(10.2) 復 高台外径	50	〃	SK003 〃	〃	29
13	〃	須恵器	椀	(19.0)×(一)×(一) 復	40	〃	〃 〃	〃	24
14	〃	土 師 器	甕	(27.6)×(15.8)×(一)	60	〃	SK008 〃	08. 31	136
15	〃	〃	〃	(18.6)×(9.3)×(一) 復 残	30	〃	SK003 〃	06. 11	37
16	〃	〃	〃	(17.15)×(一)×(一) 復	45	〃	〃 〃	07. 30	28
17	〃	〃	坏	(12.0)×(3.2)×(7.90) 復 復	40	〃	SK004	06. 11	142
18	〃	〃	〃	(13.6)×(3.3)×(7.4)	完形	〃	〃 一括	08. 31	183
19	〃	〃	〃	(13.25)×(3.6)×(7.55)	75	〃	SK005	〃	160
20	〃	〃	〃	(12.35)×(3.85)×(7.45)	75	〃	〃	〃	159
21	〃	〃	〃	(13.4)×(3.10)×(8.30) 復 復	35	〃	SK004 〃	06. 11	141
22	〃	〃	〃	(13.5)×(3.95)×(7.3) 復	75	〃	SK004 一括	08. 31	182
23	〃	〃	〃	(12.9)×(3.75)×(7.7)	90	〃	SK005	〃	158
24	〃	〃	〃	(13.2)×(3.75)×(7.5) 復	55	〃	SK004	06. 11	31
25	〃	〃	〃	(15.85)×(3.7)×(8.6) 復 復	75	〃	〃 一括	08. 31	181
②6	〃	〃	〃	(13.0)×(3.9)×(6.8)	60	〃	SK007 pit内	07. 22	41
27	〃	〃	〃	(12.7)×(3.9)×(7.3) 復	30	〃	〃	〃	40

番号	時代	種 類	器 種	法 量 (口径)×(器高)×(底径)cm	残存状 況(㎖)	用途	出土遺構	出土年月日	実測番号
28	平安	土 師 器	椀	(16.78)×(7.15)×(8.4) 復 復 外径	45	祭祀	SK005 土壇	87. 08. 31	KIZ-A 164
29	〃	〃	坏	(14.1)×(2.0)×(9.4) 復 復	30	〃	SK007	06. 11	42
30	〃	〃	〃	(16.80)×(1.40)×(12.40) 復 復	50	〃	SK004	〃	137
31	〃	〃	〃	(15.70)×(2.40)×(13.30) 復	70	〃	SK004	〃	139
32	〃	〃	〃	(18.0)×(1.60)×(14.0) 復 復	50	〃	〃	〃	140
33	〃	〃	〃	(17.75)×(1.8)×(13.2) 復 復	70	〃	〃	〃	138
34	〃	〃	〃	(12.80)×(2.95)×(7.30) 復 復	35	〃	P-1	〃	3
35	〃	〃	〃	(13.0)×(3.60)×(7.30) 復	50	〃	〃	〃	8
36	〃	〃	〃	(11.80)×(3.30)×(6.90) 復 復	40	〃	〃	〃	2
37	〃	〃	〃	(14.35)×(6.0)×(一) 復	40	〃	P-2	07. 29	165
38	〃	〃	〃(蓋)	(17.6)×(3.0)×(一)	55	〃	〃	07. 28	162
39	〃	〃	〃(〃)	(19.40)×(一)×(一) 復	20	〃	P-11		11
40	〃	〃	椀	(16.1)×(7.0)×(8.1) 復 復	45	〃	P-1	06. 11	7
41	〃	須恵器	甕	(18.2)×(10.30)×(一) 残	—	〃	P-3	07. 29	163
42	〃	土 師 器	坏	(13.70)×(3.35)×(8.40) 復	35	〃	P-8	06. 11	9
43	〃	〃	〃	(14.2)×(2.5)×(12.2) 復 復 復	20	〃	P-2	07. 29	172
44	〃	〃	椀	(12.4)×(5.4)×(6.6) 復 外径	60	〃	P-12	06. 11	33
45	〃	〃	〃	(一)×(一)×(7.65)	50	〃	P-17	07. 22	1
46	〃	〃	甕 口縁部	(2.69)×(12.70)×(一) 復 残	40	〃	P-12	06. 11	135
47	〃	〃	鉢	(21.80)×(10.50)×(一) 復 残	20	〃	P-17	07. 22	6
48	〃	〃	坏	(12.8)×(1.80)×(8.2) 復	25	〃	P-15	07.	43
49	〃	〃	〃	(15.20)×(1.15)×(11.70) 復	45	〃	P-11	〃	10
50	〃	〃	〃	(15.75)×(1.5)×(12.3)	50	〃	P-19	07. 29	12
51	〃	〃	〃	(16.65)×(2.2)×(一) 復	60	〃	P-22	07. 30	21
52	〃	〃	〃	(15.15)×(2.7)×(12.05)	80	〃	〃	〃	20
53	〃	〃	〃	(13.5)×(3.5)×(7.0) 復	60	〃	P-20	07. 29	170
54	〃	〃	〃	(14.40)×(5.0)×(8.0) 復 復	30		P-17		5

上和泉遺跡（A・C地区）出土土器一覽表

番号	時代	種類	器種	法量 (口径)×(器高)×(底径)cm	残存状 況(備)	用途	出土遺構	出土年月日	実測番号
55	平安	土師器	坏	(12.40)×(3.60)×(7.80) 復	40	祭祀	P-17	87. 07. 22	KIZ-A 4
56	〃	〃	〃	(13.40)×(3.55)×(6.70) 復	70	〃	P-20	07. 29	171
57	〃	〃	〃	(12.30)×(3.3)×(7.75)	80	〃	P-22	07. 30	18
58	〃	〃	〃	(12.95)×(一)×(6.8)	50	〃	P-19	07. 29	13
59	〃	〃	〃	(13.13)×(3.7)×(7.2)	85	〃	P-20	〃	169
60	〃	〃	〃	(14.7)×(3.45)×(一)	75	〃	P-22	07. 30	19
61	〃	〃	〃	(13.13)×(3.45)×(7.7) 復	60	〃	P-20	07. 29	168
62	〃	〃	〃	(13.58)×(3.6)×(7.1) 復	70	〃	〃	〃	167
63	江戸	土師質土器	鉢	(33)×(一)×(一)	20	貯蔵	SD002	08. 31	207
64A	〃	〃	甕	(57.00)×(一)×(一) 外径復	—	〃	〃	〃	186
64B	〃	〃	〃	(一)×(一)×(26.50) 復	—	〃	〃	〃	〃
65	〃	磁器	皿	(一)×(一)×(7.5) 外径復	30	日常 什器	〃	〃	187
66	〃	〃	碗	(10.30)×(5.60)×(4.10) 復	45	〃	〃	〃	190
67	〃	〃	小皿	(9.3)×(1.5)×(5.4) 外径	85	〃	〃	〃	64
68	〃	〃	燈明皿	(6.20)×(5.10)×(5.00)	80	仏具	〃	〃	188
69	平安	土師器	坏	(12.1)×(3.3)×(6.4) 復	60	祭祀	SK010 土壇	07. 28	KIZ-C 212
70	〃	〃	〃	(12.25)×(3.35)×(7.1) 復	45	〃	〃	〃	155
71	〃	〃	〃	(11.9)×(3.73)×(6.95) 復	50	〃	〃	〃	154
72	〃	〃	〃	(14.05)×(1.5)×(10.7)	90	〃	〃	07. 29	144
73	〃	〃	〃	(13.0)×(1.8)×(9.7)	50	〃	〃	07. 28	156
74	〃	〃	〃	(17.0)×(2.35)×(8.8) 復	〃	〃	〃	07. 29	151
75	〃	〃	〃	(13.6)×(6.2)×(7.8) 復	40	〃	〃	07. 28	191
76	〃	〃	甕	(18.4)×(13.7) 復	30	〃	〃	〃	148
77	〃	〃	鉢	(22.3)×(11.55)×(12.2) 外径	完形	〃	〃	〃	157
78	〃	〃	〃	(21.8)×(一) 復	70	〃	〃	〃	149
79	〃	〃	甕	(24.1)×(19.4) 復	40	〃	〃	〃	210
80	〃	〃	〃	(19.6)×(14.0) 復	50	〃	〃	〃	189

番号	時代	種 類	器 種	法 量 (口径)×(器高)×(底径)cm	残存状 況(%)	用途	出土遺構	出土年月日	実測番号
⑧1	平安	土 師 器	壺	(14.30)×(26.10)×(17.60) 口径外径	85	祭祀	SK010 土壇		KIZ-C 206
82	〃	〃	坏	(12.8)×(3.1)×(6.9)	70	〃	SK011	87. 07. 29	49
83	〃	〃	〃	(12.5)×(3.2)×(6.9)	70	〃	〃	〃	146
⑧4	〃	〃	〃	(13.2)×(3.6)×(7.4)	完形	〃	〃	〃	30
⑧5	〃	〃	〃	(12.7)×(2.9)×(7.4)	90	〃	〃	〃	34
⑧6	〃	〃	〃	(12.45)×(3.6)×(6.8)	完形	〃	〃	〃	214
87	〃	〃	〃	(15.5)×(3.4)×(8.2) 復 復	35	〃	〃	〃	58
88	〃	〃	〃	(12.4)×(2.8)×(6.4) 復	70	〃	〃	〃	50
89	〃	〃	〃	(12.6)×(3.4)×(7.0)	90	〃	〃	〃	61
90	〃	〃	〃	(15.1)×(3.7)×(8.2) 復	80	〃	〃	〃	194
⑨1	〃	須 恵 器	〃	(11.8)×(3.4)×(6.6)	85	〃	〃	〃	32
92	〃	土 師 器	〃	(13.1)×(3.4)×(7.3)	完形	〃	〃	〃	174
93	〃	〃	〃	(14.1)×(3.5)×(8.0) 復	50	〃	〃	〃	47
94	〃	〃	〃	(12.22)×(3.05)×(6.3)	完形	〃	〃	〃	195
⑨5	〃	〃	〃	(13.3)×(3.5)×(7.4)	〃	〃	〃	〃	178
⑨6	〃	〃	〃	(13.15)×(3.1)×(7.85)	〃	〃	〃	〃	175
97	〃	〃	〃	(15.5)×(1.3)×(12.0)	70	〃	〃	〃	59
98	〃	〃	〃	(14.15)×(1.7)×(10.35) 復	70	〃	〃	〃	55
⑨9	〃	〃	〃	(14.7)×(1.7)×(10.6)	90	〃	〃	〃	35
100	〃	〃	〃	(15.45)×(1.3)×(11.3) 復	75	〃	〃	〃	65
⑩1	〃	〃	〃	(15.0)×(1.8)×(10.8)	90	〃	〃	〃	145
⑩2	〃	〃	〃	(14.8)×(2.1)×(12.4)	90	〃	〃	〃	177
103	〃	〃	〃	(14.7)×(1.5)×(11.35)	80	〃	〃	〃	57
⑩4	〃	〃	〃	(21.1)×(2.0)×(17.0) 復	30	〃	〃	〃	199
⑩5	〃	〃	〃(蓋)	(15.5)×(2.2)×(8.8)	80	〃	〃	〃	51
106	〃	〃	〃(〃)	(14.9)×(2.1)×(8.9)	80	〃	〃	〃	56
⑩7	〃	須 恵 器	〃(〃)	(13.8)×(1.8)×(—) 復	30	〃	〃	〃	201

上和泉遺跡（A・C地区）出土土器

番号	時代	種類	器種	法量 (口径)×(器高)×(底径)cm	残存状 況(%)	用途	出土遺構	出土年月日	実測番号
108	平安	土師器	坏	(9.20)×(1.35)×(4.50)	60	祭祀	SK011 土壌	87. 07. 29	KIZ-C 193
⑩	〃	須恵器	壺	(10.2)×(6.0)×(―) 復 残	―	〃	〃	〃	200
110	〃	土師器	甕	(17.6)×(8.0)×(―) 復 残	40	〃	〃	〃	198
111	〃	〃	鉢	(22.7)×(8.30)×(―) 復	〃	〃	〃	〃	197
112	〃	〃	〃	(23.2)×(―)×(―) 復	30	〃	〃	〃	63
113	〃	〃	椀	(14.2)×(5.7)×(7.3) 外径	60	〃	〃	〃	48
⑪	〃	〃	〃	(14.45)×(5.65)×(8.5) 外径	完形	〃	〃	〃	196
⑪	〃	須恵器	〃	(17.32)×(7.88)×(9.1) 外径	ほぼ 完形	〃	〃	09. 04	161
⑪	〃	土師器	〃	(15.9)×(6.1)×(8.1) 外径	80	〃	〃	07. 29	62
⑪	〃	〃	〃	(14.6)×(―)×(8.15) 復	50	〃	〃	〃	147
⑪	〃	須恵器	〃	(14.25)×(6.8)×(7.1) 外径	ほぼ 完形	〃	〃	〃	36
⑪	〃	土師器	〃	(16.25)×(7.15)×(8.8) 外径	70	〃	〃	〃	39
⑫	〃	〃	〃	(14.0)×(5.4)×(6.9) 復	60	〃	〃	〃	54
⑫	〃	〃	〃	(18.1)×(―)×(―)		〃	〃	〃	153
	〃	土師器	坏	コンテナ数 2箱			ピット 1～20		地区 A
	〃	〃	坏 椀	2箱			SK001 ～008 土壌		A
	〃	〃	〃	1箱			SK010 土壌		C
	〃	〃	〃	5箱			SK011 土壌		C
			計	10箱					

○印は実測図・写真共に掲載、無印は実測図のみ掲載

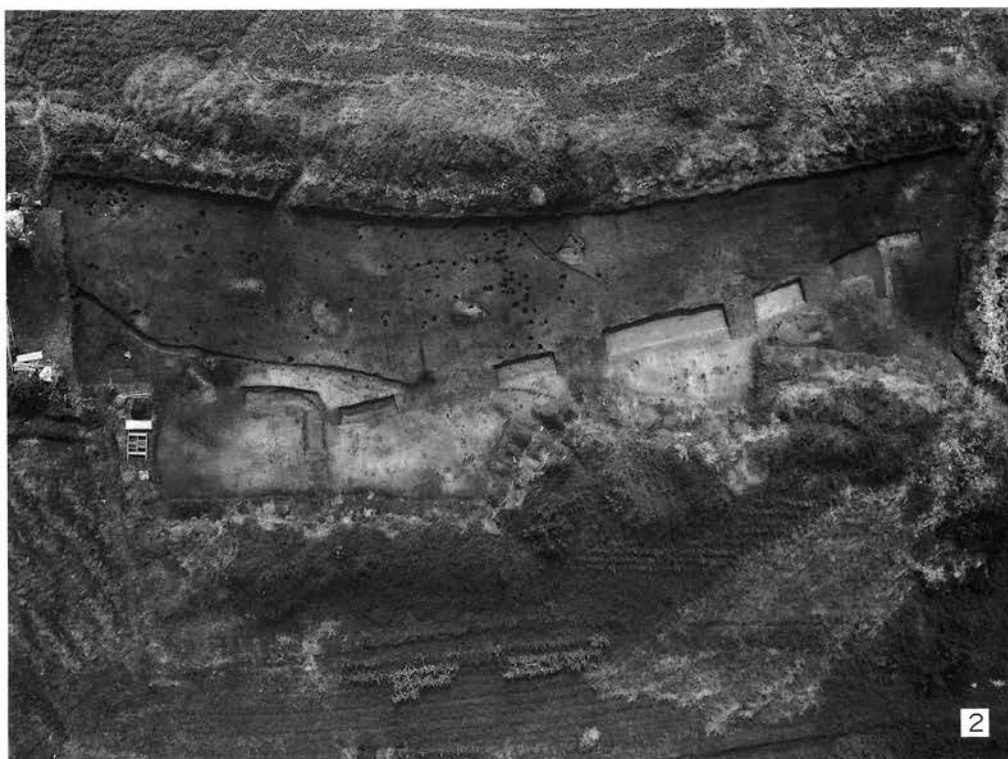
表内、法量の残は残存器高、復は復元径を表わす。

コンテナ法量（内法）は縦54cm×横34cm×高さ20cmのものを基準とする。

版 図



上和泉遺跡調査区全景 (A・B・C地区)



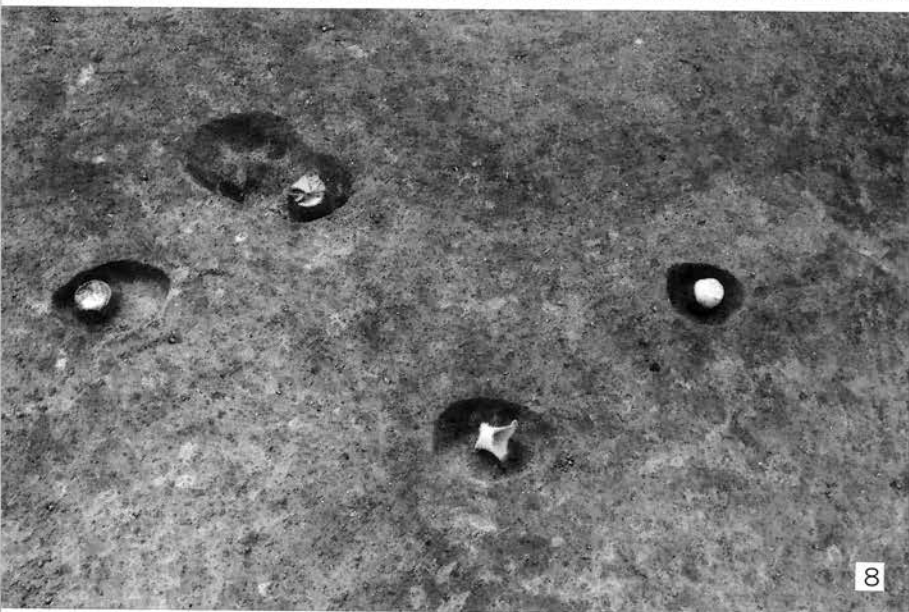
A地区全景



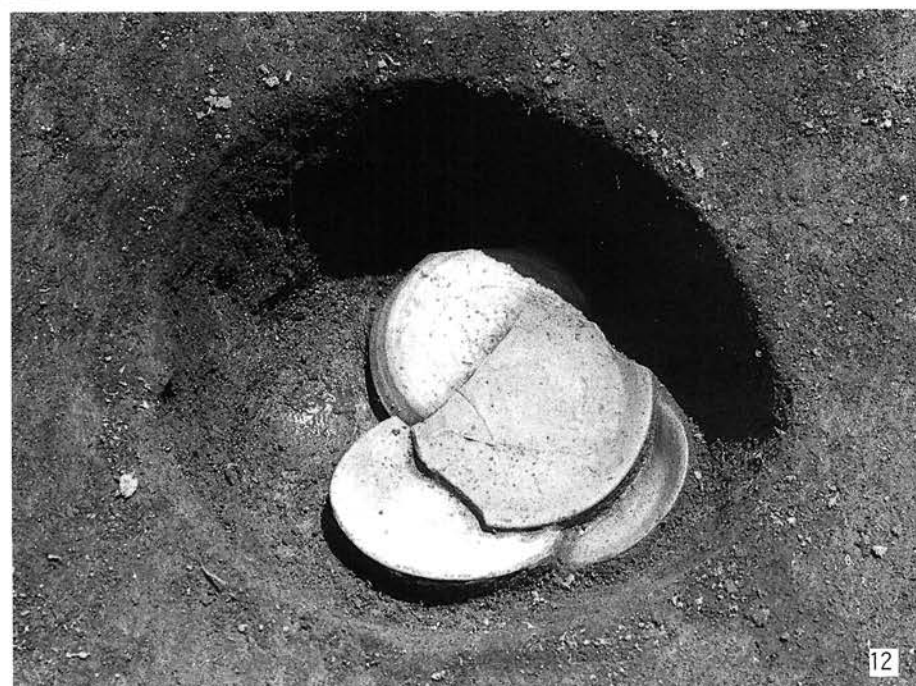
C地区全景（調査区下部、2条の溝状のものは調査時の排水路）



- 4. SK002土壇
- 5. SK003土壇
- 6. 左からSK004、005、006土壇



- 7. SK008土壌
- 8. A地区ピット群
- 9. P-2



- 10. P-3
- 11. P-20
- 12. P-22



13. S D002溝 (土層断面)

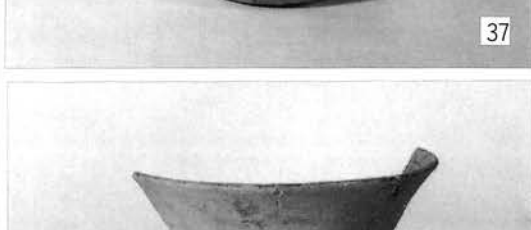
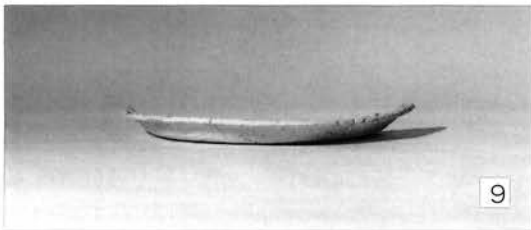
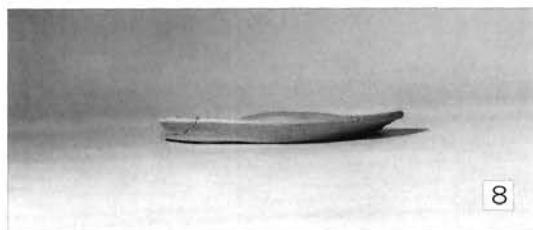
14. B地区全景



16. C地区S K010土壙土器出土状況 17. S K010土壙土器取上げ後



17. S K011土壇 18. 作業状況





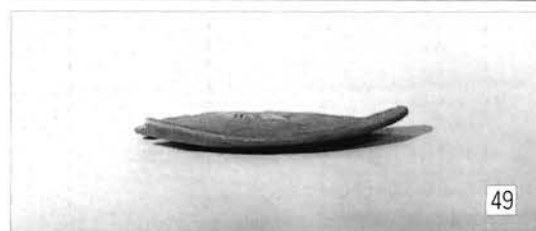
41



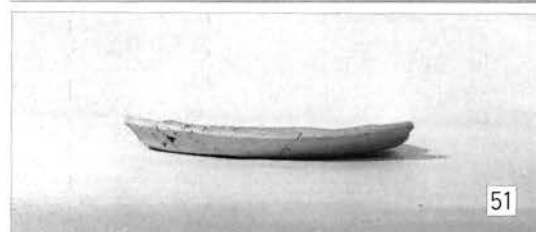
43



46



49



51



53



58



42



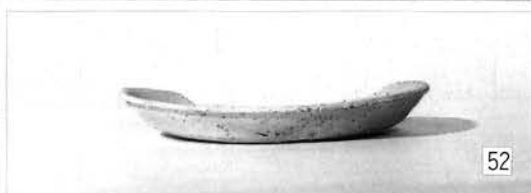
44



47



50



52

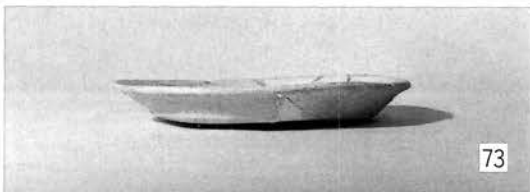
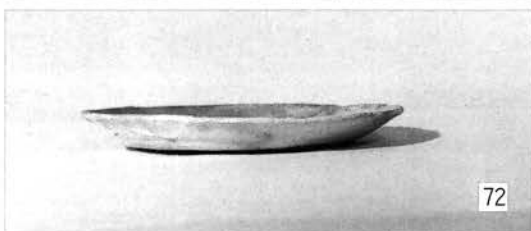
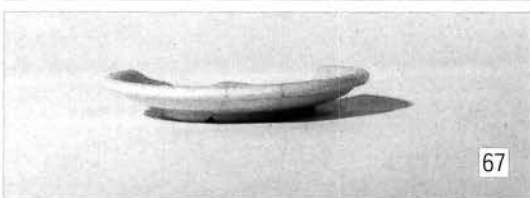
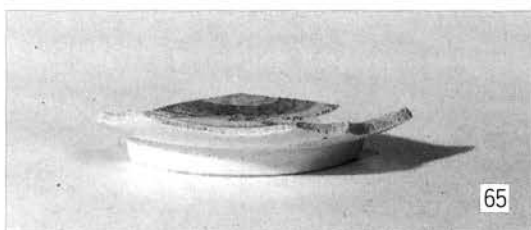
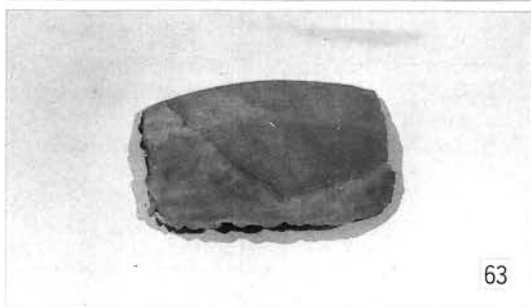
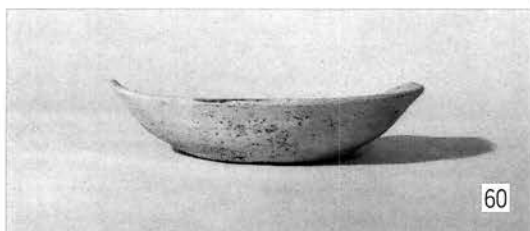


56



57

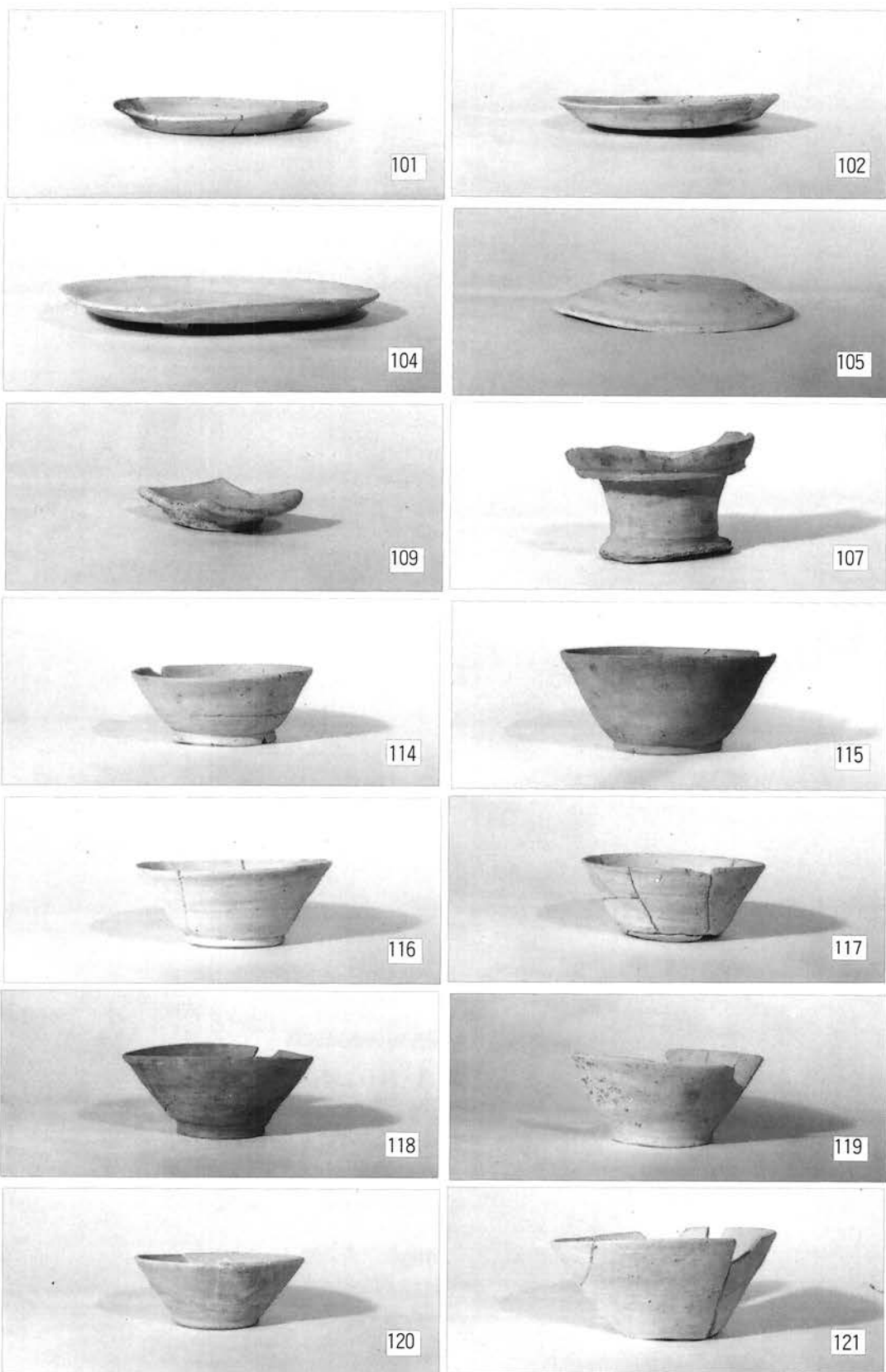
41. P-3、42. P-8、43. 44. 46. P-2、
49. P-11、50. 58. P-19、51. 52. 57. P-
22、53. 56. P-20





77～81. C地区S K010土壇出土

85～99. C地区S K011土壇出土



101~121. C地区S K011土坑出土

佐賀市文化財調査報告書第20集
上和泉遺跡(A・B・C地区)

昭和63年3月31日

発行 佐賀市教育委員会
佐賀市栄町1番1号

印刷 日之出印刷株式会社
佐賀市高木瀬町大字長瀬1136-55